

# MECCだより

武蔵野・多摩環境カウンセラー協議会広報紙 第24号 2010年12月

巻頭言・生物多様性雑感	川真田 直之
「MECC 2010年度活動報告と交流・懇親会」報告	糸井 守
COP10（生物多様性条約会議）名古屋会議参加報告	竹本 秀人
昭島市の環境施策について	昭島市環境部環境課長 古谷 裕且
新入会員紹介	井田 秀明・只野らつきよ



左から：ジュウガツザクラ、ツワブキ、センリョウ（写真提供：中西由美子）

## 巻頭言

## 生物多様性雑感

MECC副理事長 川真田 直之

名古屋でCOP10が開催されるにあたり、「生物多様性」が種々の報道で取り上げられている。生物は動物相(fauna)と植物相(flora)から成り立っているが、現在の地球規模のマクロな推定値は200万種～1億種、最良の推定値はほぼ1000万種と言われている。

生物多様性の概念を共通語として定義したのは1992年のリオ・サミットで、種間、種内、生態系のそれぞれの多様性を含むとしている。この多様性は地球の生命誕生以来、現れては消えながら環境に適応し、生存競争に打ち勝ち、生存圏でのバランスを保って突然変異や遺伝子の複合結合により多様化し現在に至っている訳である。

今日の世界で何が生物多様性に対し問題になっているかと言えば、地球上の一つの種に過ぎない人類が、個人や地域、組織や国家の欲望のために地球規模の大きな環境の変化を起こしている元凶であることに気付いていないことである。それによって生態系に適応できない種が滅亡して多様性が急速に減少するため、他の種にとって有用な資源が消滅していることである。また、人類の各生態圏を取りまく生物資源を、地球としての資源であるにも拘わらず、自分の資源であるかの様に考え、勝手に資源を搾取することから、

人類の生態圏の間で紛争が生じていることである。

生物は一定限界以上に増加すると必ずバランスが崩れ滅亡する種が発生する。また、それが引き金となって、その生物に依存していた他の生物種も大きな影響を受け、連鎖的に生物種が滅亡する現象が起きる。イナゴの大群が植物を食い尽くし自己滅亡するのと同様に、人類も現状を変えない限り、何時の日か必ず自滅する運命を辿ることになるだろう。

人類は生物の頂点に位置する種ではあるが、他の種と同様に個・群・生息環境のレベルで最適状態を日々目指して努力している。しかし、どのレベルに於いても周辺とのバランスを崩すことは、多くものを失うという事態を発生させる。最終的にやり過ぎたことが判っても、その時点では後の祭りの状態となる。特に生物資源に関しては、気付いた時点でその資源が無くなって後悔することになる。

生物資源の乱獲や移動、地理的破壊、それに加えて純粋の天変地動により急激に変化している状態に、生物は決して追従できるほどの適応性は持っていない。このことを認識して人類が覚醒し、新しい考えで生き残ることを真剣に考えなければならない時期に来ていると私は考える。

# 「MECC 2010年度活動報告と交流・懇親会」報告

MECC 理事長 糸井 守

昨年、本会の設立10周年を記念して開催した「活動報告と交流・懇親会」が好評であったことから、毎年開催することになり、本年は、平成22年10月21日に吉祥寺南町コミュニティセンターにて開催しました。参加者は、武蔵野市や小平市等の環境関連部署の管理者をはじめ、多摩地域の環境市民団体のリーダー、市議会議員、商工関係者、他のカウンセラー協議会の代表者など50数名のみなさまにご参加いただきました。

内容は、3部構成で、第1部はMECCの1年間の活動報告、第2部は「環境アラカルト」として女性会員によるフリートーク、第3部は交流・懇親会という流れで進めました。

第1部の内容は、環境経営システム（EA21）、自然環境の生物多様性（井の頭池外来魚対策）と自然観察会、地球環境とエコロジカル・フットプリント、環境活動指導者講座、海外環境プロジェクト（エコトイレット施設推進）、等が報告されました。

第2部では、3名の女性会員（および1名のビデオ出演）による環境活動の企画推進や参画形態、会の活動への課題意識等について、各々の立場からのトークが行われました。



環境アラカルトのトークの様子

第3部は、ビールで乾杯の後に、豚汁やおにぎり、サンドウィッチ等の飲食をとりながら、邑上武蔵野市長を始め、ご参席のひとり一人にスピーチを頂き、環境全般の様々な問題について、フリーで活発な懇談をしました。最後に、川真田副理事長の閉会のあいさつがあり、午後2時から6時半まで4時間半でしたが、アツという間の楽しく有意義な時を共有することができました。

折しも、当日は名古屋でCOP10の生物多様性国際会議の開催中で、環境問題が世界の緊急対応課題として論議されている時期でもあり、「環境カウンセラー」の活躍していく必要性を強く認識する時でもありました。

## MECC 交流・懇親会アンケート結果より

交流・懇親会では、参加者にアンケートを書いていただき、今後に役立てていこうと考えています。そのアンケート結果の概略をご紹介します。

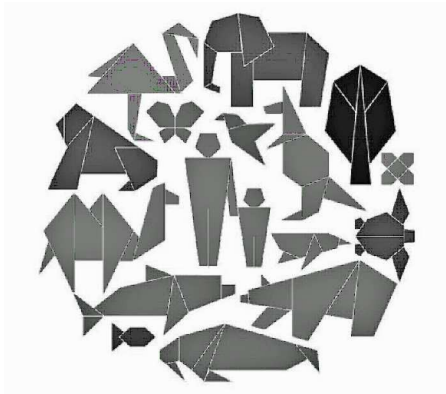
・「何に最も期待していらっしゃいましたか」（複数回答）に対し、「環境カウンセラーに関する情報を収集」が33%、「様々な環境方面の人との交流」が44%、「環境に関する知識の取得」が22%という結果でした。交流の場としての期待が大きいことがわかりました。

・「MECCの活動報告で、もっとも印象に残った、または興味あるテーマは何でしたか」に対し、「環境教育」「海外のトイレ（バングラデシュのトイレ）普及」「エコロジカル・フットプリント」「EA21」「井の頭池の外来魚調査」といった、MECCの幅広い活動に関心が寄せられたことがわかりました。また、新企画である「女性3名のトーク」も面白かったという評価をいただきました。

・「改善が必要と感じたことがあったら書きください」に対し、「開催日と時間帯は再検討してはどうか」「素晴らしい報告だけれど時間が不足」「懇親会は立食にしてはどうか」などのご意見が寄せられました。貴重なご意見として、今後の企画に活かしていきたいと考えます。

# COP10（生物多様性条約会議）名古屋会議参加報告

竹本 秀人



生物多様性条約（CBD）第10回締約国会議（COP10）は、10月18日（月）～29日（金）に愛知県名古屋市にて開催されました。全部で179カ国、13,000人が参加しました。

今回もCOP10会議は先進国対発展途上国としての利害対立が目立ちました。最終的には、報道されていますとおり政治決着になりました。結果として議長国、日本が多くの資金的援助を新興国に支払うことになりました。

私は、22日および23日の2日間、主に私の研究課題である海洋関連のオーシャン・デイ（海洋・海底・深海関連の生物多様性関連）の会議に出席しました。この海洋関係の討議内容を中心に以下に報告します。

1. 海洋生物の多様性に関する今回の会議の目的は、海洋・沿岸域の生物多様性の喪失の主要な原因に対応し、世界的な目標の現状を評価・討議する事にありました。会議には各国の政府機関、国連関連等の国際機関（FAO, SCOR, ICES等）、NGO等の代表が参加し、海洋・沿岸域の生物多様性に関する重要なテーマに沿ってパネルディスカッションが行われました。

2. 海洋・沿岸海域には多種多様な魚介類、プランクトンなどが生息し、豊かな漁場を形成しています。この豊かな海を健全な状態に維持し、改善を図っていくためには、藻場や干潟等の水質改善に資する海域の保全・回復を図ると共に生物に有害な化学物質が海域に流入することを抑制し、これらの物質の監視のため各国がモニタリング手法を含め、さらなる管理を強化する必要があります。

3. 一番の関心事は、地球規模での環境問題と食糧問題に対する海洋の生物生産の持続性、生息場所の確保と保全、社会・経済的なあるいは生態的な価値評価による統合的診断、そして生物多様性の保全です。その方策の一つとして、2012年までに世界の「海洋保護区」ネットワークを構築することに各国が全力をあげる必要があります。すなわち、世界の海洋及び沿岸域の少なくとも10%が効果的に保全されるべきとの話が活発に行われました。

4. この「海洋保護区」の目標設定を現在の目標の10%より15%位まで高める必要性なども議論されました。なお、日本の現在の「海洋保護区」は5～6%程度です。

5. 幸運な事に海洋関係研究当時にご教授頂いた、日本海洋財団の寺島紘士氏（専務理事）が10月22日、オーシャン・デイの会議の議長でした。寺島氏は、世界第6位の排他的経済水域を有する我が国の海洋・海底資源維持の戦略立案や、2008年に制定された海洋基本計画の構築に最もご尽力された方で、今回も地球の3分の2を占める海洋・海底の生物多様性の維持の具体的な持続可能な施策を提案されました。現在新聞紙上などで論じられている陸上の生物多様性の問題、例えば陸上の生物のレッドリスト等よりもはるかに数の多い海洋生物の維持管理の大切さを、今回再認識しました。

終りに：今回の会議を通じて一番感じたことは、地球環境を維持するために必要なことは、人類による「母なる海」「海の命」を守ることに尽きるということです。そのためには世界屈指の海洋国日本の役割が今ほど問われている時はない、というのが今回会議に出席した感想です。



# 昭島市の環境施策について

昭島市環境部環境課長 古谷 裕且

今年10月、名古屋市において生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が開催されたのは記憶に新しいところです。人間の生活は多種多様な生物に支えられて成り立っているにも関わらず、人間による開発や乱獲による生態系の破壊や生息地の減少、自然環境の汚染により毎年何万種もの生物が絶滅しているといわれています。この大きな課題に対して、国際社会が協力して取り組んで行くことと同時に、私たち一人ひとりも今すぐ出来ることから行動に移していくことが必要なのではないでしょうか。

さて、昭島市は平成13年度策定の「昭島市環境基本計画」のなかで「美しい水とみどりを将来の世代に」を基本理念に位置づけ、環境行政を展開しています。また、地下水100%の水道水を供給している本市の特性も踏まえ、独自に「水と緑の基本計画」の策定も現在、進めています。新計画は、立川崖線等の緑の保全、多摩川や玉川上水、湧水や農業用水等

の保全、また、生物多様性にもつながる取り組みを掲げています。

一方、広域的な取り組みとして、平成16年9月に昭島市・(財)東京都農林水産振興財団・山林所有者の三者で50年間の分収造林契約を結び、多摩川の水源地域である奥多摩町の鋸山山腹に植林を実施しました。奥多摩町民との交流をもちながら奥多摩と昭島を結ぶ森となることを願い、「奥多摩・昭島市民の森」と名づけています。現在は、大人から子どもまでが自然に親しみ実体験の中から環境保護意識を高めてもらおうと、下草刈りなどの森林教室を開催しています。

今後は「環境基本計画」の中間見直しを予定しており、その中には「地球温暖化対策地域推進計画」も盛り込み、これらの計画を中心として環境施策全般を展開していく予定です。今後ともお力添えのほどよろしくお願い申し上げます。

## ● 新 会 員 紹 介 ●

### ＜井田秀明さん＞



八王子在住の井田秀明です。精密機械製造会社で、顕微鏡や血液分析機の開発・製造を約20年間経験してきました。1998年から社内で環境担当となり、ISO14001認証取得や環境配慮設計の推進などを経験しました。退職を機に会社一辺倒から 地域

での活動に参加をしたいと思っていた時にMECCに参加の機会をいただきました。9月より月例会に参加をし、皆さんの活発な意見交換や活動の様子に圧倒されている次第です。やっと社会に係わり始めたばかりの初心者です。これまでの経験を踏まえて少しずつ地域のお役に立てるように、活動テーマを見つけたいと思いますので、ご指導のほどよろしくお願いいたします。



### ＜只野らっきょさん＞

林家ライス・カレー子門下の只野らっきょと申します。ライス・カレーの弟子なので「らっきょ」という名前でございます。私は「環境漫談」という芸をしております。マイハシ・マイバックを持ち、ゴミの分別などの実践から、身近なことを話題とするネタを作っております。その他は南京玉すだれやパルーンアートなどの芸を身に付けております。

来年は師匠のおかげで4月末にピースボートに乗り、80日間で世界一周の修行の旅にいかせていただくことになりました。芸に磨きをかけながら、世界の環境を見て参ります。環境に関しても、芸に関してもまだまだ未熟ではございますが、がんばって参ります。何卒宜しくお願いいたします。

発行者：NPO 武蔵野多摩環境カウンセラー協議会 (MECC) 事務局  
180-0003 武蔵野市吉祥寺南町3-31-16 糸井守  
TEL：0422-45-0352 FAX：0422-45-0353  
ホームページ：http://www.mecc.or.jp/  
編集者：中西由美子